

## 2003 年度岩本ゼミ活動報告

松岡 孝恭

### 春合宿 (4月2日・3日)

春合宿は若狭白浜で行った。例年の通り、一泊二日でその間に一冊の本を輪読した。今年の春合宿では、小宮隆太郎、日本経済研究センター編『金融政策論議の争点』(日本経済新聞社)に取り組んだ。この本は日本の金融政策に大きな影響力を持つ経済学者と日銀の政策担当者が、それぞれの立場でゼロ金利政策の導入と解除、量的緩和政策の是非といった問題について意見を述べている。経済学を学び始めた自分にとってはレベルの高いもので、読み残した部分が多かったように思う。論文を分析的に読めるようになる必要性を感じた。

### 前期ゼミ

岩本ゼミでは一年ごとに国際マクロ経済学と国際貿易論を交互に勉強している。2003年度は貿易論だった。テキストはクルーグマン・オブストフェルトの『国際経済学』第5版(エコノミスト社)を用い、前半の貿易論の部分を読み進めていった。

ゼミの雰囲気としては質問や意見が出ることが少なく、プレゼンとその内容の確認に終わっていたように思う。ゼミの時間は2コマ与えられていて一回に一章のペースで読み進んだのであるが、時間を余らせることが結構あった。

あるトピックについて意見を言い、それで討議を進めていくことは難しい。議論を突り多いものにするにはその場にふさわしい問いかけをする必要があるし、質問するにはその内容をある程度分かっていないといけな。こうしたことは初めからうまくできるわけではなく、たくさんの試行錯誤をくりかえして次第に身につくものだと思う。ゼミの空間はそうした実践を行なう場所であり、ただ内容を頭に入れるための場所として利用するのは惜しい。自分のことを言えば、前期のゼミで何回も見当はずれの意見や、取るに足らない質問をしてきたように思う。トレーニングの結果、うまく問いを立てられるようになったかどうかは心許ない部分もあるが、議論をするときに役立つスキルはこのようにしてしか身につかないと感じた。

ゼミで議論をする方法のなかで割と簡単にできるものとしては、「異見」を用意しておくことであると思う。ゼミで読むようなテキストは、それが入門用のテキストであることもあって、トピックの記述がそれ自体で完結している場合が多い。それゆえ、テキストのことで質問をしても答えはテキストにあるということになってしまう。しかし、答えが本の中である程度与えられていて、読めば分かるという状態では大勢で一冊の本を読むことの面白さがない。そこで、一つか二つテキストに書かれていない主張を用意して発表してみるとよいのではないだろうか。それは最近のニュースでも、自分の経験談でも何でもよ

いと思う。テキストとうまく関連をつけて発表できれば、別の視点を得てそこから議論ができるであろう。

#### 夏合宿（9月22日・23日）

夏合宿は城崎温泉に行った。後期のインゼミで自由貿易協定（FTA）を取り上げることを決めていたので、その準備として FTA の基本的な内容を合宿で勉強した。前期の授業で貿易論を勉強してきた成果が現れ、合宿は有意義なものとなった。読み進めたテキストは、浦田秀次郎・日本経済研究センター編『日本の FTA 戦略』（日本経済新聞社）と『FTA ガイドブック』（ジェトロ）の数章。基本的な内容のものであったが、そこで使われていた分析手法はその後の論文執筆の際に利用することができ、大いに役立った。

#### 後期ゼミ

後期はディベートと論文発表のため、レギュラーの時間のほかにサブゼミを設けて岩本ゼミの FTA に対する見解を作り上げていった。ディベートのテーマは、「日韓自由貿易協定の是非について」であった。レギュラーの時間はこのテーマに関連して、雁行形態論を中心としたアジア地域の経済発展の様子や韓国経済の現状を調べた。

ディベートについては、最終的なテーマを決めるのが遅かったように思う。テーマに若干の変更が加わることがあるにしても、大枠は夏合宿前に決めておくべきだったと反省している。今回の場合は、夏合宿で FTA については決まっていたが、対象とする地域や内容までは決めていなかった。もし地域を韓国と日本にすると決めておけば、後期に入ってもう少し余裕をもってディベートの準備が進められたのではないかと思っている。

テーマの設定は相手校（今回は高崎経済大学）との交渉が大切である。こちら側でどれだけ議論を煮詰めていても、相手が別のことをやっているディベートにならないので、まず相手との交渉を優先したほうがよい。渉外の役割が重要になってくる。

また、細かくテーマを決めていく際には、扱う対象や条件をいかに絞り込むか、対立点となる場所は何かといったことに注目していくとよいと思う。テーマが決まり、賛成・反対あるいは肯定・否定のどちらにつくか決まったのであれば、次は何をもって主張を行なうか、自分達の立論の根拠は何かをはっきりさせるべきである。今回、岩本ゼミは日韓自由貿易協定の肯定側についたが、主張の根拠は貿易データから組み上げた日本と韓国の商品貿易に関するいくつかの指標であった。これらは論文のほうにまとめたので見てもらいたい。

ディベート当日のことでは、両校とも相手の言質をとることに精一杯でディベートの中で自分達の主張をわかりやすく伝えるということができていなかったように思う。それから、相手との対話の中で自分達の立論を守り、相手の主張を崩すということがとても難しいことに感じた。ディベートもまた普通のゼミの延長にあると思うので、日頃からある内

容について議論を行なう練習をしておくそれがディベートで生きるのではないだろうか。

ディベートのあと、論文を同じテーマで書いた。論文は同志社大学、神戸大学、明治大学が参加した合同研究会で発表する機会が与えられ、ヨーロッパ経済とアジア経済の状況を金融面と貿易面から研究した論文を各大学は発表した。

## 後記

論文のことを少し紹介しておきたいと思います。この論文では貿易データから算出した各指標が分析の中心となっています。これらの多くは国連が発行した大部の書物からデータを取り出してきたもので、紙媒体にあったものをエクセルに入力していくという地道な方法を取りました。入力を手伝ってくれた上田君、西村君、片山君に感謝したいと思います。

論文のアイデアはゼミでの話し合いの中から生まれてきました。後期が始まった時点では論文が最終的にどうなるかについてまったく予想もつかなかったので、10月以降、たくさんの人からアイデアをいただいたことによって論文ができあがったのだと再び確認しています。とりわけ、サブゼミにおいて夜遅くまで自由闊達に話し合いをしながら、全員で分からない箇所を確認したり、自分達の主張をまとめていったりしたことは、とてもスリリングな経験でした。

来期のゼミは、こうしたサブゼミの雰囲気のように、話し合いの中から知識を獲得する機会が増えることを期待したいと思います。